

7 下呂市金山地域の民話

(7-1) 波切不動明王

①話の内容

下原中切の「ほき山」の国道沿いに、波切不動明王と刻んだ石像が古くからお祀りしてあった。眼病治癒に靈験があると言いついて、昔から信仰されていた。

その昔、中切区の某が、洪水の時、この上流で川木を拾っていたが、足をすべらせ濁流渦巻く中へ落ちこんだ。そのまま押し流されてこのあたりまで来ると、不思議なことに底に足が立って楽々と岸へ上ることが出来た。これは神仏のお加護にちがいないと思って、波に因縁のある波切不動明王の石像を上った岸辺に建立して信仰した。

(参考資料『金山町誌』ほか)

②取材調査

金山町中切地域では毎年7月の第四日曜日に波切不動の例祭が行われている。例祭を見学した際、例祭の餅撒きに集まっていた女性から話を聞いた。

「昔は大勢の人がお参りに来て、この例祭の日は益田川で水泳大会も行われた。」

「私たちが水泳大会に参加したのは昭和10年代の終わりのころ。水泳大会はこちら（益田川の右岸）から向こう岸（左岸）まで行って帰ってくるというものだった。」

戦時中ではあったが、地域の行事は継続して行われていたという。

翌日、波切不動世話人の二村清さんから話を聞いた。

「以前からこの地域に不動明王の石像があり、信仰されていたようだが、洪水で二つに割れてそのままだったようだ。三河地方の前田さんという方が昭和初期に熱心に地域に働きかけ、地域の人たちによって祀られるようになった。」という。



例祭（7月26日下呂市金山町）



本殿の不動明王像（7月26日）



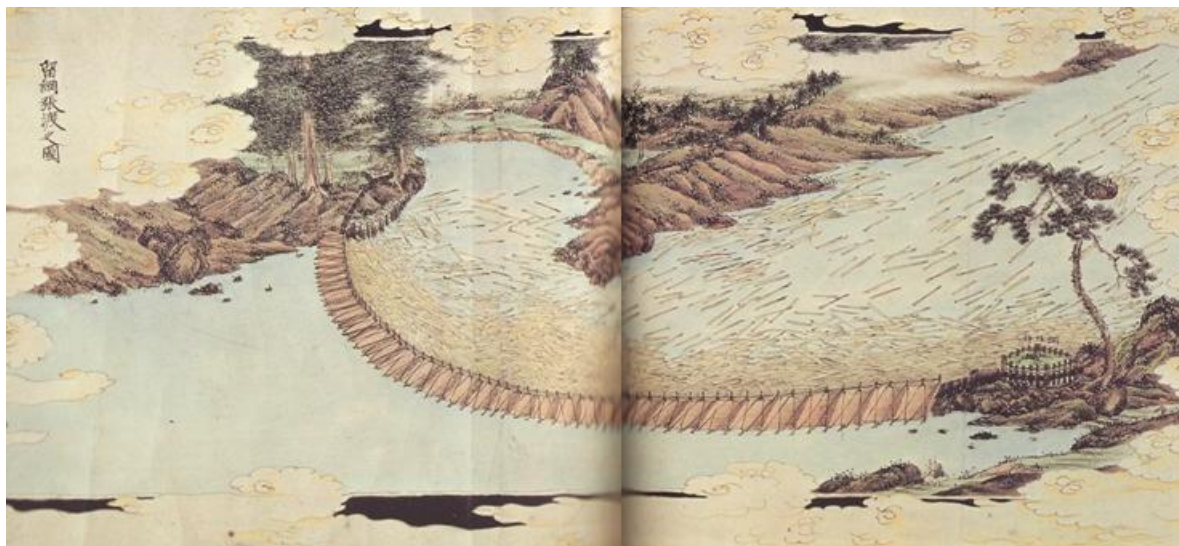
例祭後の餅撒き（7月26日）



二村清さんの取材（7月27日）

③研究・考察

波切不動の近くには下原中綱場跡があり、近くに番所跡がある。益田川上流から流されてきた木材はすべてこの綱場で役人によって改められ下流の下麻生に送られ、いかだに組んだ後、太田、犬山、円城寺を経て白鳥に集められ、その後、海路で江戸や大坂に運ばれた。ダムのある現在とは違い、多くの水量があった当時の益田川は、建築物が木造だった当時、生活資源を運ぶ大切な交通路でもあった。



官材図会「留綱張渡之図」(『飛騨下呂図録』より)



福来口の番所跡 (右の建物)
(7月27日下呂市金山町)



下原中綱場跡(7月27日)

下綱場跡の近くにある下原小学校の校歌には、街道の物流をチェックした御番所が歌詞に現れる。作詞をしたのは、高山出身の詩人福田夕咲である。彼は合併前の小坂小学校の校歌(25頁)も作詞しており、地域の歴史を歌詞に織り込んでいることがわかる。

- | | |
|---|--|
| 1 昔をしのぶ 御番所の
かたみの松を あおぎつつ
古きを尋ね 新しき
学びのわざに いそしまん | 2 川をへだてて 美濃の国
南の風の 吹く奈辺に
園のたかむら 打ちそよぎ
校舎のいらか いや高し |
|---|--|

不明な点や難解な歌詞があるので、下原小学校の卒業生である養護教諭の橋本弥生先生に話を聞いたが、当時はよく分からず歌っていたという。そこで、下原小学校の桂川修教頭先生に話を聞いた。

- ・ 1 番の歌詞にある「御番所のかたみの松」は現在校舎に植えられている。かつて御番所にあった松である。
- ・ 2 番の歌詞の「川」は益田川。かつては川を隔てると美濃国であった。また、「たかむら」は「箕」と書き、竹藪のことをいう。学校のあった竹藪に風が吹いている様子を詞にしている。

現在、下原小学校では地域の学習の中で、在校生に歌詞の意味を教えているという。



下原小学校 (8月31日下呂市金山町)



明治時代、軍の調練場があった大船渡ダム。川向こうは美濃国だった。

(8月31日下呂市金山町)

益田川と石像に関する話として、萩原町西上田に伝えられている送り地蔵の話がある。

「このお地蔵様は享保 18 (1733) 年、桑名より舟にて木曾川を遡って信州の上田村へ向かわれましたが、途中、上田違いから本流を逸れて飛騨川に入り、下麻生に着岸しました。それから陸路をとり、多くの人々の善意により、無料奉仕にて次々と送りつがれて、この地、上田村西上田に到着されました。当地ではご縁あってお出でになった仏様ということで当時の西上田五十八戸で地蔵講を作り今日までご供養してまいりました。以来子供をお守りくださる地蔵様としてその由来から西上田の送り地蔵さまと名付け親、しみをこめて信心なされております」(西上田神社『送り地蔵看板』より一部改変)

正月にはたくさんの餅が飾られる。現在も地域の人たちに温かく見守られている。



西上田の送り地蔵
(8月10日下呂市萩原町)



西上田の送り地蔵
(2013年1月1日下呂市萩原町)

(7-2) 鶏鳴滝

①話の内容

昔、都に美しい姫が、金色に光り輝く鶏とともに暮らしていた。静かな日々が続くと、鶏の輝きは辺りを金色に染めるようになり、優しくしてくれる姫の体までも金色の光で包むようになった。いつしか都の人たちから「黄金姫」と呼ばれるようになった。

しかしある日、鶏が飛び立っていなくなってしまう、都では争いごとが頻繁に起こるようになってしまった。姫は「天皇は争いごとで心を病んでおられる。命に代えてでも行方を捜さなければ申し訳がない。」と鶏の姿を求めて出かけたが、都のどこを捜しても見当たらない。姫は比叡の山寺を訪ね、小さな観音堂を借りると中から扉を硬く閉ざし、二十一日間飲まず食わずに過ごす「願かけの行」に入った。すると、うつろな姫の目の前に観音様がお立ちになって、「今から東に向かって旅立ちなさい。飛驒への道に差しかかるとその深い谷には大きな滝が鳴り響いているはずです。きっとそこで、あなたの願いは叶うでしょう。」と優しくおっしゃった。姫は決心をして旅に出たが、百日ほどたつと、すっかり心も体も疲れ果ててしまっていた。

ある夜明けのこと、目指す尾根の彼方から、忘れもしないあの鶏の声がかすかに聞こえてきた。我を忘れて一気に山を登りつめると、深い谷があり、観音様が言っていた滝が目の前に広がっていた。すると、にわかに滝が輝き始め、その中からあの黄金の鶏が飛び立った。やがて、その輝きが消え、あたりが静まりかえると、滝つぼの上に大きな観音様が現れた。その姿は黄金の鶏の輝きに包まれていた。姫の探す鶏は、この美しい滝の守り主、清流の観音になっていた。

それが分かると、姫の体から力が抜けてしまい、旅で少しずつむしばまれていた病によって、姫は亡くなってしまう。村の人たちは姫を小高い丘に葬ると、そこを「ひめづか」と名づけた。

その夜、一羽の金色の鳥が、「ひめづか」から西の空の彼方へ悲しい羽音をさせて飛んでいったという。そのころから、横谷川の大滝では、元日の明け方になると鶏の声がかすかに聞こえてくるといい、その滝を「鶏鳴滝」と呼ぶようになった。(『金山町誌』)

②取材調査

金山町横谷に「四つの滝」(白滝、二見滝、紅葉滝、鶏鳴滝)があり、横谷峡と名付けられている。鶏鳴滝は落差 33mあり、四つの滝の中で最も大きい。訪れた日は蒸し暑い日だったが、滝の周りはとても涼しく、散策している観光客の姿も見られた。

鶏鳴滝の伝説に基づき、毎年正月には地元の人たちがこの滝を参拝する。残念ながら鶏の声が聞こえてくる、という話を聞くことはできなかった。



鶏鳴滝 (7月27日下呂市金山町)

③研究・考察

横谷峡を流れる水は馬瀬川に合流し、益田川に注ぐ。馬瀬川と益田川が合流する渡地域の境橋のもとには、国土地理院が飛驒の測量を初めた水準点がある。

金山町内には湧き水を利用できる二ヵ所の水場がある。そのうちのひとつ東清水の水場では、住民が共同管理しながら、水槽を飲料用→冷蔵用→食品の洗浄用→洗濯用、と使い分け、利用している。水場には神棚が飾られており、人々の湧水に対する思いを知ることができる。また、生活用水が流れる水路に沿って路地裏通りが縦横無尽に巡っている。金山地域ではこの道を「筋骨（きんこつ）」といい、筋骨を散策するツアーも行われている。



境橋(上)と基本水準点(下)
(8月19日下呂市金山町)



東清水水場(8月19日下呂市金山町)



東清水水場(8月19日下呂市金山町)



水路と筋骨(8月19日下呂市金山町)